
彼女の一途すぎる愛にKANPAI

a-m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の一途すぎる愛にKANPAI

【ZPDF】

Z0130Z

【作者名】

a - m

【あらすじ】

ある平凡な男子高校生が入学当初から卒業まで・・いや、死ぬまで”ある”美少女なストーカーから愛され続ける「メディーな恋愛話。一途すぎるほどの愛の前に平凡な彼は抵抗するも完敗です。いや、むしろ一途すぎる彼女の愛に乾杯？

(前書き)

短編2作目も「メモリー」です

世界觀が変わりまして今日は現代小説です

暇つぶしの程度のかるーーい小説です。

れいわじーっとお読みトモヤ

愛しの彼は言いました。

「無理です。本当に無理です。『めんなれ』。勘弁してください。」

全く迷いつく無く瞬時に答えたのです。

3年間ですよ?

3年間ひたすら愛し続けた彼の0・1秒すら迷つてもいいです

拒絶された私はどうすれば良いのでしょうか。

「・・・理由をお聞かしてもらいたいのですか?」

ついに・・・ついに・・・ついに田舎へ戻った。やがてだへまいりた。まへまいりた。

高校入学当初から本当に・・ほんとーに毎日のよつて彼女は俺を尾行し続けた

もう 本当に恐ろしいまでの執着心を發揮してくれた

軽くトラウマなことも多々あった

今思い出しても恐ろしい

家まで尾行され電柱の陰から「おやすみなさい」と幽霊のよつて囁かれた

休日に友人と遊んでいて気づけば背後に彼女を発見した

カラオケで歌つていればドアの窓から彼女がのぞいていた

図書室で授業をサボつていたら、本棚の陰からシャッター音が聞こえた

何かと思えば、盗撮されていた

盗撮被害を言い並べればきりがない

それが今、この瞬間 卒業式の当日まで3年間続いたのだ

俺の高校生活＝ストーカー被害にあった歴

こんな公式が簡単に頭に浮かぶ

そんな彼女の名前は佐々木 うた

わいわいの栗色の長髪に、ぱっちり一重の眼と、白い肌

もし・・彼女がほんの少しでも常識といつものを持っていたら

もし・・彼女がほんの少しでも常識といつものを持っていたら

きっと彼女は全校の男子共からモテモテのウハウハだつただひつ

何が悲しくて神様は彼女にこんな性格を与えたのかつ

そしてそんな彼女に何故か入学式の日に標的にされてしまった俺は
といえば

平凡も平凡 素晴らしくビームでも平凡な一般男子であり

本来ならば彼女のような”美少女”に好かれるような男ではない・

嬉しくもないのにたつてしまつた”美少女から愛されぢやう平凡男

子” フラグ

もしだ もし

もし、彼女が世間一般にいう普通の”美少女”であったならば

俺はきっと最高の高校生活を送っていたはずである

ああ 何故ですか 神様

お願ひだから天は一物を『えて下さい

彼女限定でいいですから』えて下さい

とこうことで、俺の目の前で無表情のまま涙を流す彼女に話を戻そつ

説明した通り俺は3年間彼女からストーカーされ続けた

だけれど、ちゃんと話しかけられたのは今が初めてなのである

それを考えると余計怖くなるが・・・

家の前の電柱の陰から「おやすみなさい」と囁かれた事は多々あった

体育の後、猛ダッシュで俺の横を通り過ぎた彼女に

「お疲れさまでしたああ」と叫び声をかけられた事も多々あった

朝教室に行くと、机の引出しの中に白い小さな紙に、

これまた小さな赤い文字で「おはよう」「やあこまわ」と書いておいて
あつた事も多々あった

つて、また考えだと怖いし、しかも多くあつすきて言えないけれど

まあ、そういう接触は毎日のようになつたのに、

ちやんと顔と向かって声をかけられたのは今が初めてなのである

無事卒業式が終わり、俺はこれで彼女と縁が切れる事に正直安堵していた。

そんな俺の安堵を凄まじい破壊力で粉々に壊した彼女・・・

教室で友人らと「卒業しても友達だ」的な王道トークをしていた時
俺と向き合っていた友達がいきなりフリーズし、顔中に恐怖を浮かべた

その瞬間俺は気づいたね

背後に奴がいるっつーつーつー

怖々振り向いたら、俺の本当にすぐ背後に張り付くように佇んでいた彼女を発見した

俺は恐ろしすぎて悲鳴すらあげられなかつた。

そして初めて、彼女をすぐ側で見た俺は、やつぱり普通なら美少女だ
・・・なんて場違いな事を思つたり・・

俺とがっちり目を合わせた彼女は無言で俺に手紙を渡してきた。

恐怖に震えながらも受け取った手紙には・・

”今すぐ裏庭に来て下さい。”

いや・・・口で言つて下さによ・・・

無言で俺を見続ける彼女に俺も無言で了承の意を示すように頷いた。

すると、彼女は静かに教室を立ち去った。

そしてその場に残された俺と友人2名は無言で視線を合わせた。
俺は確信している・・・あの時、皆の心は一つだった

”漸く待ちに待つた瞬間が訪れるのだ” ってね・・・

そり、漸く俺に告白といつものをしてくれるのだ

今迄あんだけストーカーしていたくせに、

一度も彼女から”好き”というワードを示してくれた事はなかった

だからこそ、俺も彼女に断りの言葉を入れる事が出来ず今に至ったのだ。

めいめいへ ょーつー ゃーべー 両えますつ

そして予想通り彼女は俺に告白した。

「ずっと好きでした。そしてこれからも永遠に好きです。私と恋人
同士の関係になつて下さい。」

可愛い声でした。

ええ、可愛いです

確かに顔も声も可愛いです

今迄の行動がなければ俺は迷わずテンションアップアップで即OKしていたことでしょう

でも俺は言いました よつやく言えました

言つてやつました

「無理です。本当に無理です。『めんなさい。勘弁してください。』

その言葉を10秒ほどかかつて理解した彼女の表情は無でした。

もう完璧な無表情でした。

だけれど、瞳だけは違いました。

ひと瞬の涙が彼女の美しい頬に流れました。

つて・・・あやああああああつつ

泣いているーーー泣いているぞつづつーー

俺は人生で初めて女子を泣かせてしまったつ

色男でもないのひつ

平凡なほど平凡なノーマル男なのひつ

あわあわ、と慌てる俺に彼女は驕り笑つたんだ

理由を説明しようと・・

12

「私の言葉に彼は荒れるよ」と言いました。

「うつ理由つ?...そんなつっそんなの今迄のキリの行動が理由だよ

早口言葉ではないのですから、もつともうくつ仰ってくれればいいのひ

戀じて恋じて彼は矢継ぎ間に言い連ねました。

「だつて考えてみてよつへーキ!!、俺のこと毎日、本当に毎日観察つていうかストーカーしてたよね?!.怖すきでしょ'リハ?怖いよつ!」

え?ストーカーですか?

私の記憶ではそのような犯罪を犯した覚えはないのですが‥‥

まあ、愛しい彼のお言葉ですから、黙認致しましょ。

そして、私の告白を断る理由をまだまだ彼は言い連ねます。

「学校がある日だけじゃなく、休日まで氣づけば背後にいるなんて

一体なんのドジキリ?!.つてこうか心靈現象?!.」

私は幽霊ではありませんので、心靈現象といつ言葉は間違っている
よつに思えるのですが

愛しい愛しい彼のお言葉ですから、黙認致しましょ。

そして私は約10分程黙認し続けました。

息も切れ切れな彼。

漸く理由を言い終えたようです。

ですが、いくら聞いても納得ができません。

愛する彼のお言葉ですから黙認は致しますが、私の認識とはかけ離れているのです。

3年間一途に愛し続けた私の想いは、

こんな納得のできない理由ばかり並べられても消滅はしないのです。

「良治様・・・愛しい貴方のお言葉ですから納得はできなくとも反論は致しません。」

このようなすれ違いの理由は、私の努力不足が原因だと思われます。

良治様、これからはもっと良治様に私のこの激しい愛が伝わります

よつ、一層の努力をいたします。

大学生活では良治様の御武運を見守るだけではなく、

毎日いかなる時も良治様のすぐお側で良治様をお支え致しますわ。

私のこの熱い想いが伝わったのでしょうか。

良治様の素晴らしい平均的なお顔が固まりました。

2分待つても固まつたままの良治様。

ああ、これは一途に3年間想い続けた私に対する良治様ならではのお礼なのでしょうか？

こんなお側でお写真をとれる機会を下さるなんて！

カラスが山に帰る頃

いくら待てども戻つてこない良治を心配した彼の友人達が裏庭にやつてきました。

そこには泣き崩れる良治と

溢れんばかりの笑顔で嬉々として写真を取り続いている佐々木 う
たを発見しました。

その光景を目にした友人達は無言で裏庭をあとにしました。

帰り道、友人達は囁き合います。

「俺、予言しちゃつていい?」

「俺も予言しちゃつていい?」

「「良治つてきっと死ぬ迄ストーカー被害にあい続けるよな」

息がぴったりな彼らの言葉を裏付けるかのようなイベントが催されたのは8年後でした。

「良治様？これで私達死ぬ迄一緒にですね！」

「はい。もう・・・はい。良いです、きっともうそれで良いです。」

ある晴れた空の下

とある教会で、ある一組のカップルが神様に見守られながら結婚式を催しました。

幸せいっぱいに微笑みバージンロードを歩く美しい花嫁と

そんな花嫁を苦笑しながらも迎える平凡な青年の姿。

そんな彼らを見つめる良治の高校時代からの友人2人は今でも息ぴつたりです。

「「予言があたった。俺達　スト　ダム よりすげえっ！」」

(後書き)

今回は現代の「メモリイー

2作続いて「メモリイー短編

きつと次はある意味シリアスなスーパー・キー小説

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130z/>

彼女の一途すぎる愛にKANPAI

2011年11月30日20時46分発行